



# 特集 災害

二一世紀になり、世界各地で増える災害の数々。それは肉体的な面でも精神的な面でも、人びとに大きな影響をおよぼす。人びとは苦難からいかに立ちなおったか。周囲からの援助のあり方はどうだったか。そして災害に対し、文化人類学、民俗学はどうかかわっていくべきかを、この特集で考えてみたい。



## 現代の地球環境と自然災害

石 弘之  
(いしひろゆき)  
北海道大学特任教授

### 事象と被害の区別

二〇〇四年二月のインド洋大津波を皮切りに、二〇〇五年八月のハリケーン・カトリーナの米国上陸、同一〇月のインド・パキスタン大地震とハリケーン・スタンの中米襲来など、大きな被害を伴う自然災害が立て続けに起きた。何百万人という人びとが被災し、「地球の異変では」という恐怖が世界に広がった。

二〇〇五年一月に神戸市で開かれた国連防災会議の席上でも、一九九四―二〇〇三年の一〇年間に世界の自然災害の発生件数は二五〇〇件以上、二億人以上の人が洪水、地震、ハリケーンなどの自然災害の被害に遭ったという報

告があった。これは、それ以前の二度の一〇年間の数字を六〇パーセントも上回っている。この数字を鵜呑みにすると、災害は激増していることになる。

災害に関しても数々の名文句を残した物理学者で随筆家の寺田寅彦氏は、「地震の現象」と「地震による災害」とは区別して考えなければならぬ」と書いている。災害を引き起こす現象、つまり「原因事象」(Event)の発生頻度を調べた研究によると、地表一平方キロメートルあたり年間〇・三件前後で、過去数十年ほとんど変わっていない。つまり、問題は地震や台風「の件数」が増えているのではなく、災害に巻き込まれて被災する「被害」(Disaster)が増えていることにある。

災害を扱う国際機関は、①一〇人以上の死亡 ②一〇〇人以上の被災 ③国家非常事態宣言の発令 ④国際救援の要請、のどれかの条件を満たさない限り、自然災害としてデータベースに登録しない。いくら大地震が南極の内陸部で発生しても、被害がなければ「事象」にすぎない。

### 人間側の責任

これだけ、被害が増大しているのは、自然側ではなく、人間側に責任があることはいうまでもない。サンゴ礁隆起

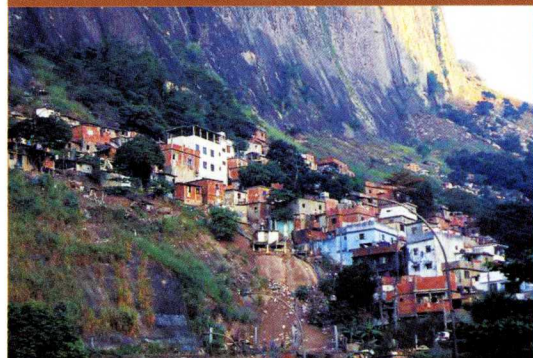
の痕跡などから、約二四〇年前にもスマトラ島沖で巨大地震が発生して大津波が起きたことがわかっている。だが、その被害の記録はなく、あつたとしても海岸際に住む住民の数は少なく、被害に遭った人もきわめて限られていたに違いない。

襲うような乾燥地帯に、多くの人びととくに貧しい人たちが住まざるをえなくなっている。さらに、森林伐採や乱開発など環境破壊が、以前なら軽微だった被害を大きくしている。

高潮地帯のスラム。台風で真っ先に被害を受ける(マニラ近郊)



崖っぶちに建っている集落。地すべりが起きればたちまち崩れ落ちる(リオデジャネイロ)



# 災害をとおした 本来の民俗学とは

森栗 茂一  
(もりくり しげかず)  
大阪外国語大学教授



修学旅行での体験プログラム。震災の記憶をパン屋さんから伺う住吉台くるくるバス。(神戸市長田区丸五市場) 子ども駅長が運転手に花束贈呈



コーディネーターが不足。また、そのマネージメント能力が欠如している。  
②①の原因は、クルマを中心とした個別消費にある。高齢化に対して、クルマに頼りすぎない暮らしをどうつくるのか。  
③地域の産業や暮らし、災害の記憶を住民が案内する「まちあるき」を、住民全体で展開する必要がある。

## 災害から学ぶ

この間にも、世界各地で大災害がおき防災研究は進展した。この流れのなかで、文化人類学においても、災害の人類学が展開されている。

しかし、今や住民協働型交通まちづくりに忙しい元民俗学者のわたしは自問する。災害で(を材料に)災害民俗学がしたかったのか。いや、違う。

災害そのものを研究し、民俗学の視点に立った防災まちづくりをしたかったのか。震災の記憶、防災活動を修学旅行で体験するプログラムは、そうした活動かもしれない。しかし、それが目的ではない。

わたしは、災害をきっかけに時代の生き方を模索する人びとから学び、持続可能な社会を考えてきた。

災害をきっかけに、現場を流浪し思考してきたが、民俗学とは、本来、そういうものではなかったかと、元民俗学者は煩悶しているのである。

## 阪神大震災で見たもの

関東大震災では、考現学の今和次郎がスケッチを残した。阪神大震災では、都市計画、法、経済、社会学者の市民連帯的研究はあったが、文化人類学者の関心はほとんどなく、震災を記録し、関与し、世のため人のため(柳田國男が主張した民俗学)に動くことなど思いもよらなかった。

唯一、神戸在住のわたしは阪神大震災で動いた。わたしが見たものは、独居高齢者が避難所で居場所を失い、死んでいく姿。郊外遊休地の仮設住宅における、厳しいが故にささえ合う暮らし。住みなれた

まちへの思慕と断念。自立的なまちづくりの動き。そのなかで、ジャーナリスト、事業家、行政マン、プランナー、それに一部の学者らとNPO神戸まちづくり研究所を設立した。

## 10年経って何が見えてきたか

行政が「震災の教訓」をいくら吹聴しても、安心・安全まちづくり、地域で日常をささえ合う福祉は困難である。そもそも、男も女も遠方で働き、クルマで移動しコンビニで個別消費する。ポラントリ一なまちづくり活動は、一部の退職市民

がいない、特定集団化し、そして高齢化する。復興基金がとどめる五年目、震災のささえ合う記憶から生まれたNPOやボランティア活動は、はたばたと消えた。  
わたしは、暮らし方を変えねば震災の教訓など残らないと思う。

復興公営住宅では、四〇パーセントの超高齢化、重厚長大産業の衰退・移転、ボランティア活動といった今日の日本の現状を神戸は震災で一〇年先に体験した。これに関与し観察してきたわたしは、以下の課題を認識している。

①コミュニティ活動をしようにも、市民のコミュニケーション能力が減退し、

ではなく、権力関係を含んだ複雑な人間関係に身をおきながらの実践である。

日本では、阪神淡路大震災以降、被災者ばかりでなく消防や行政などの対応従事者も含めて、災害の体験をできる限り具体的に調査することが試みられ、その方法と成果がエスノグラフィ(民族誌)の名でよばれている。人類学への関心も決して低くはない。

## エスノグラフィ

インド洋地震津波災害の調査は、短期間で実施し、報告書にまとめなければならぬという制約があり、おもに被災地住民、行政、救援組織の活動についての相

互関係に着目した調査となった。しかし、その後の復旧・復興支援も含めた「災害」という出来事を、人びとはそれぞれの社会的な役割のなかでいかに経験したのか、それが政治・経済や文化にどのような変化をもたらしたのか、当初の強行スケジュール調査に携わった人類学者たちによる持続的な努力は今も続いている。

生活世界に入り込んだ継続調査によって、社会現象としての災害の変化をとらえることこそ、他分野の研究者たちとともに、災害・防災研究をさらに深化させることであり、あのときも、そして今も期待されている。もちろん「ナイーブさ」を重視しながら。

# 災害とエスノグラフィ

林 勲男  
(はやし いさお)

本館民族社会研究部

## インド洋地震津波災害

二〇〇四年一月二日にインド洋沿岸のほぼ全域を襲った津波は、この地域を研究する者に大きな衝撃を与えた。調査地やテーマの変更を余儀なくされたり、その後の調査でさまざまな問題に直面した研究者も少なくない。

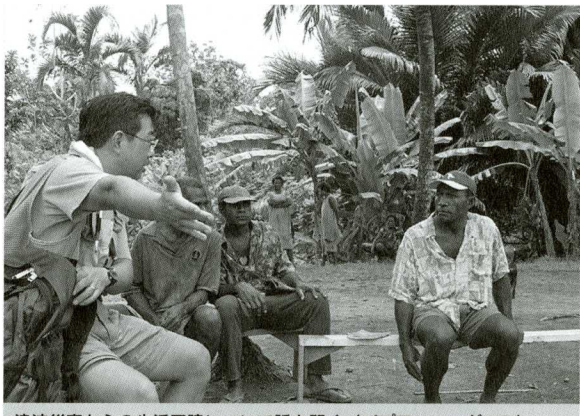
わたしは、一九九八年のパプアニューギニア津波被災地調査や、フィリピンのマニラでの地震防災プロジェクトをとおして、さまざまな専門性をもつ災害・防災の研究者たちとすでに共同研究活動をおこなっていた。その経緯から、インド洋地震津波災害では、現地に詳しい研究者を派遣するためのコーディネーターの役割を担った。研究者への調査依頼や、文科省その他の機関との調整など、わたしの冬休みはほぼすべて、この仕事

に費やされた。

## ナイーブな人類学者

建築学をバックグラウンドとする防災学者から、「人類学者はナイーブである」と言われたことがある。どういふことか聞いてみると、工学出身者は研究あるいは調査の名のもとに、それ以前にはまったく意識の無い人の家にも臆面もなく入っていき、建物の構造や家具の配置を調べるだけでなく、その家庭の経済状況までも聞きだす。ある人類学者に「よく、そんなことができるなあ」と呆れられたそうだ。彼にとつて人類学者の調査は、インタビュウがなかなか核心部分にいかず、世間話のような時間がやたら長く感じられるのだろう。海外での調査経験も多く、学生時代はインドネシアのある島で長期滞在調査をした経験もある彼ですらこうであるから、効率性を重視した緊急調査しか経験のない他の防災学者にとつての、人類学のフィールドワークに対するイメージは推測に難くない。  
ならば、インド洋地震津波災害発生から一、二カ月後に、単なる現地ガイドや通訳としてではなく、「ナイーブな人類学者」に社会調査者として何が期待されたのであるのか。

いうまでもなく、人類学のフィールドワークは、人びとの生活世界に参与することによって、彼らについての知識をえていく。それは決して一方向的な知識・情報の流れ



津波災害からの生活再建について話を聞く(パプアニューギニア)



昭和南海道地震(1946年)の津波到達点には、次の津波に備え、避難タワーが設置された(和歌山県串本町)

# 災害

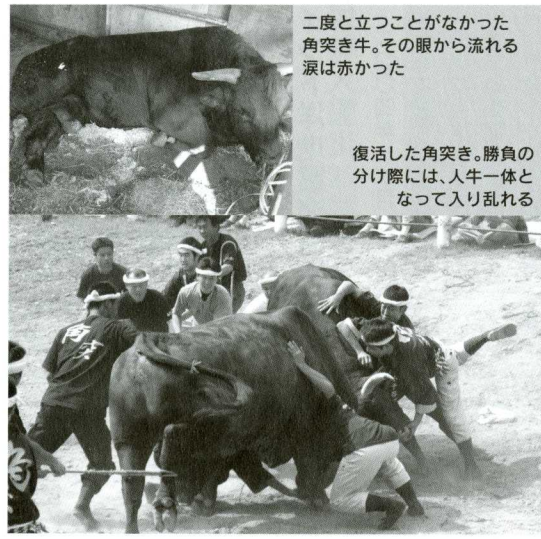
全壊した自分の家を再建する前に、牛舎の心配をする若者がいる。この地において、角突きは、人びとがそこで生き続けるための理由と原動力となつていく。そして、それは紛れもなく残った人びとの結集の原点となつている。人びとを繋ぎ止める角突き。それは文化財としての価値以上の価値を、この山のなかで生み出しているのである。

この地には、古くより角突き(闘牛)が継承されている。それは国指定重要無形民俗文化財にもなっている。この地震で角突き牛の多くが被害を受けた。倒壊した牛舎の下敷きになつて命を失つた牛。救出されたものの、二度と立ち上がれなかった牛……。まさに家族同然に育てていた牛の死は、家族の死と変わらない悲しみをこの地の人びとにもたらした。

山奥の集落では緊急避難する際、牛を繋ぐ鼻綱を切つて解放した人もあつたという。せめて生き延びれば……と願いながら、泣く泣く置き去りにしてきたのである。繋がれたままの牛もいた。牛もたちは、避難所に入つても牛たちのことを忘れることはなかった。放つておけば地震にやられなくとも、数日中に飢えて死んでしまう。彼らは余震が続くなか、意を決して壊滅的打撃を受けた危険な山中に舞い戻り、命懸けで牛たちを救出。壊れなかった家畜市場を借りて、寝ずの番で牛たちの面倒を見て、厳寒大雪の一冬を越したのである。翌春、彼らは市の運動公園を借りて、仮設の闘牛場を自分たちの手でこしらえ、角突きを再開した。そして二〇〇六年、六月、ついに念願であつた故郷・東山での角突きを復活させた。多くの人びとが被災地の東山から離村するなか、今、多くの牛もたちが東山に戻りつつある。

角突きを続けるために、東山に戻る年寄りがある。全壊した自分の家を再建する前に、牛舎の心配をする若者がいる。この地において、角突きは、人びとがそこで生き続けるための理由と原動力となつていく。そして、それは紛れもなく残った人びとの結集の原点となつている。人びとを繋ぎ止める角突き。それは文化財としての価値以上の価値を、この山のなかで生み出しているのである。

新潟県小千谷市東山地区。二〇〇四年一〇月三十一日七時五十分、マグニチュード六・八の大地震がこの地を襲った。多くの家屋と財産が失われ、尊い人命が奪われた。



二度と立つことがなかった角突き牛。その眼から流れる涙は赤かつた

復活した角突き。勝負の分け際には、人牛一体となつて入り乱れる

## 被災者と角突き牛との絆

菅豊  
(すが ゆたか)

東京大学東洋文化研究所助教授

今回の地震、津波は、冬のリゾート地をおそい、欧米人、日本人などにも被害をもたらしたので、世界中から大きな関心の的になった。しかし、インド政府は、外国からの政府ベースの援助を断り、自力での復興をめざした。そのため世界からの援助の主体はNGO、NPOが担つことになった。そうはいつても、アメリカのUSAIDにしても、日本のジャパン・プラットフォームにしても、政府との緊密な関係のもとに運営されており、今回はとくに非政府組織というよりは準政府組織のような役割を果たしていた。

各国政府からの援助を断つたインドは、世界からのバッシングを受けた。あるインド人コラムニストは、アメリカとの軍事競争に破れたヨーロッパ諸国にとつて、援助が次なる主戦場となつていたために、これを拒否したインドが袋叩きにあつたのだと分析していた。インドの被災地にとつて、物資も資金も不足していたわけでは決してなく、むしろ有り余つていたのが実情である。被災地では二、三日のあいだに電気や水などの基本的なインフラはほぼ復旧し、恐れられていた疫病もほぼ完全に押さえ込まれた。また、被災地には使われない古着が放置されていたり、援助物資がひそかに売買されたりしていた。援助の道が滞つて難渋した人びとも多かつたが、それはおもに政治的な理由によるものであつた。

NGO、NPOは寄付を募つているために結果主義に走る傾向がある。その結果、現地のニーズと離れた「ほごし」と自己満足の押し売りになる危険もはらんでいる。バッシングを受けたインドの例は、援助の功罪をあらためて考えさせる大きな試金石となつたのである。

フリカ大陸にまでおよんだ。

今回の地震、津波は、冬のリゾート地をおそい、欧米人、日本人などにも被害をもたらしたので、世界中から大きな関心の的になった。しかし、インド政府は、外国からの政府ベースの援助を断り、自力での復興をめざした。そのため世界からの援助の主体はNGO、NPOが担つことになった。そうはいつても、アメリカのUSAIDにしても、日本のジャパン・プラットフォームにしても、政府との緊密な関係のもとに運営されており、今回はとくに非政府組織というよりは準政府組織のような役割を果たしていた。

各国政府からの援助を断つたインドは、世界からのバッシングを受けた。あるインド人コラムニストは、アメリカとの軍事競争に破れたヨーロッパ諸国にとつて、援助が次なる主戦場となつていたために、これを拒否したインドが袋叩きにあつたのだと分析していた。インドの被災地にとつて、物資も資金も不足していたわけでは決してなく、むしろ有り余つていたのが実情である。被災地では二、三日のあいだに電気や水などの基本的なインフラはほぼ復旧し、恐れられていた疫病もほぼ完全に押さえ込まれた。また、被災地には使われない古着が放置されていたり、援助物資がひそかに売買されたりしていた。援助の道が滞つて難渋した人びとも多かつたが、それはおもに政治的な理由によるものであつた。

NGO、NPOは寄付を募つているために結果主義に走る傾向がある。その結果、現地のニーズと離れた「ほごし」と自己満足の押し売りになる危険もはらんでいる。バッシングを受けたインドの例は、援助の功罪をあらためて考えさせる大きな試金石となつたのである。

二〇〇四年二月二十六日の朝に起こつたスマトラ沖地震インド洋大津波は、震源に近いインドネシアだけでなくタイ、インド、スリランカなどに大きな被害をもたらした。その影響はインド洋を介して遠くア



廃墟となつた門前市あと(2005年2月インド、ウェーラーンガン二大聖堂)

援助物資を求めて行列する(2005年1月インド、チェンナイ市)

## 援助の功罪

杉本良男  
(すぎもと よしお)

本館先端人類科学研究部

七万人を超える死者を出した一〇月八日の大地震は、この谷にも多くの犠牲者や家屋倒壊をもたらした。特にビヤリの被害は甚大で、高台にある集落全体が崩落したかのようであつた。プリンスやその一族の、立派であつたらう邸宅も原形を留めておらず、テント生活を余儀なくされていく。そして、打ち続く余震や火山の噴火の噂が追い打ちをかけていく。さらなる被害を恐れた住民の多くは、インダス川岸に設置された大テント村に避難していった。この状況が新聞やテレビで繰り返し報道されたため、村のリーダーが「援助漬け」と評するほどに、ここには援助(政府、国際機関、NGO)が集中していった。物資を満載したトラックに群がる人びとの姿は、先に訪れたカシミールの山村では、見たくても見ることでできない光景だつた。

しかし、これらの物資は「ハーン」とよばれる地主階級が獲得し、ハーンのもとで小作人として働き、牧畜をおこなう「グージャル」には届いていないようだつた。谷のより上部に暮らすグージャルのあいだの被害は、まともに調査さえされていなかった。二日間という短い滞在期間を、わたし自身もハーンの村で過ごしたわけだが、声をあげることのできないグージャルが、「援助漬け」の向こうに垣間見えた。

七万人を超える死者を出した一〇月八日の大地震は、この谷にも多くの犠牲者や家屋倒壊をもたらした。特にビヤリの被害は甚大で、高台にある集落全体が崩落したかのようであつた。プリンスやその一族の、立派であつたらう邸宅も原形を留めておらず、テント生活を余儀なくされていく。そして、打ち続く余震や火山の噴火の噂が追い打ちをかけていく。さらなる被害を恐れた住民の多くは、インダス川岸に設置された大テント村に避難していった。この状況が新聞やテレビで繰り返し報道されたため、村のリーダーが「援助漬け」と評するほどに、ここには援助(政府、国際機関、NGO)が集中していった。物資を満載したトラックに群がる人びとの姿は、先に訪れたカシミールの山村では、見たくても見ることでできない光景だつた。

しかし、これらの物資は「ハーン」とよばれる地主階級が獲得し、ハーンのもとで小作人として働き、牧畜をおこなう「グージャル」には届いていないようだつた。谷のより上部に暮らすグージャルのあいだの被害は、まともに調査さえされていなかった。二日間という短い滞在期間を、わたし自身もハーンの村で過ごしたわけだが、声をあげることのできないグージャルが、「援助漬け」の向こうに垣間見えた。

二〇〇五年二月三〇日、わたしはバキスタン北西辺境州アライ谷を訪問した。インダス川沿いの幹線道路から脇道に入り、車で二時間の山中に位置するアライ谷は、一九七一年まで小さいながらも王国として存



## 助けを求められない「グージャル」

子島進  
(ねじま すずむ)

東洋大学助教授

ほとんどの家が崩壊したアライ谷ビヤリ村

村にとどまった人びとは、冬を迎えてもテント暮らしを強いられていた